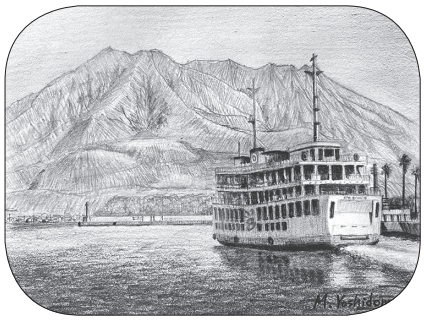
令和６年９月20日発行
通巻　第 550 号 9月号



令和６年度

鹿児島の教育

９月号

巻頭言

経営に必要な「センス」と校長の「矜持」

一般財団法人鹿児島県校長会館理事
県連合校長協会小学校長部会副部会長
鹿児島市立山下小学校長
下假屋　誠

将棋の世界はプロとアマチュアの差が最も大きいと言われる。アマチュアの全国大会で活躍する程の人でも、その力はプロレベルなら五、六級程度らしい。将棋界は四段からがプロと呼ばれる。ただでさえ天才が集まると言われる将棋界で、他のプロを凌駕する藤井聡太七冠は十四歳でプロになった。天才中の天才である。

日曜日の朝、テレビでプロの将棋トーナメント戦を見ることができる。子供の頃からよく見て、本を買って学んでみたが、ちっとも上達しなかった。凡人中の凡人である。テレビの将棋は一流プロ棋士の対局なので、一手一手の狙いは簡単には理解できないが、プロ棋士の所作の美しさと凛とした雰囲気を感じられるのが好きだった。対局中、別室で現役の人気プロ棋士が、差し手の意味や意図を解説してくれる。対局中、次の候補手をいくつか予測して紹介している解説者が、「この手は有効なんですが、プロはこの手は選ばない。」と言うことがある。たとえ確実に勝ちに近づく一手であっても、プロは決してその手を選ばないというのである。実際、その一手が選択される場を見たことはない。おそらく、その手には「センス」がないのだろう。将棋界は研究の世界である。自らの対局はもちろん、他の対局の指し手の是非まで徹底的に議論し研究する。トップに君臨する藤井七冠ですら、今だに研究に余念がないと聞く。「センス」とは、持って生まれたものではなく、プロの世界で揉まれ、磨かれ、研ぎ澄まされる一流の感覚である。目先の勝ちに囚われ、又は時間に追われ、慌ててプロらしからぬ手を指すのは、何よりも恥ずかしいことなのだろう。

学校経営も一局の将棋のようなものだ。社会や教育的ニーズの変容に対応しつつも、軸をぶらさず、責任ある判断を紡いで、子供と職員が満足できる学校を経営する。そのためには、かねてから経営のプロ仲間である校長らと積極的に議論したり研究したりしながら互いの感覚を磨き合い、一流の感覚である「センス」を身に付けたい。時には大きな変化に戸惑ったり思惑が外れたりして、すぐに結果につながり簡単に選択できる「俗手」にすがりたくなることもある。しかし、その場限りの結果ばかりを安易に欲しがれば、「校長として矜持」は失われるだろう。校長の判断や選択を、職員、他校の校長、教育委員会等の教育のプロも見ている。

五十年経っても将棋の力は凡人のままだが、学校経営については、深みのない「俗手」に囚われず、仲間のプロが深く頷く「妙手」を指せる校長でありたい。

令和６(2024)年 ９月号
一般財団法人鹿児島県校長会館
〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13
振替 02030-1-3192
TEL 257-9676 FAX 257-9679
㈲ アート印刷
鹿児島市東坂元二丁目29-1
TEL 247-1605 FAX 247-2844

＊おもな内容＊

巻頭言 …… 1
随想 …… 2
提言 …… 3
わが校の学校経営 …… 5
子どもが輝く教育 …… 7
心に残るひとこと …… 9
ある日の校長講話 …… 11
話のひろば …… 13
読書案内 …… 15
趣味・文芸 …… 17
郷土の紹介 …… 18
総務部だより …… 19
一般㈶県校長会館だより …… 20
編集後記 …… 20

随想

沖永良部島は未来のショールームだった？？！！

石田秀輝
（同）地球村研究室　代表
（一社）サステナブル経営推進機構（SuMPO）理事長
（一社）エコシステム社会推進機構（OPaRL）研究代表
酔庵塾　塾長　東北大学名誉教授

偶然のように立ち寄った沖永良部島に魅せられ、ついに移住して十年が経つ。その魅力は色あせるどころか益々際立っているが、世界は地球環境劣化とポピュリズムの台頭で分断化が進んでいる。

地球環境問題は喫緊の課題であり、厳しい順から「生物多様性」「チッソによる土壌汚染」「気候変動（温暖化）」「マイクロプラスチック」の四つの課題に二〇三〇年頃までに具体的な対応ができないと文明崩壊の引き金に手を掛けることになる。

なぜ、このような問題を起こしてしまったのだろうか？それは、「人間活動の肥大化」に原因がある。ちょっとした快適性や利便性を飽きることなく追い求めた結果である。快適性や利便性を得るためには装置が必要だが、その装置をつくるときにも、使うときにも、ほぼ全て地下資源や化石エネルギーに頼っている。資源やエネルギーを搾取するために穴だらけにしてしまった地球を自然は常に修復してくれるのだが、搾取が修復を超えてしまった結果が今の地球環境問題なのである。

地球環境問題に対する本質は自然の修復能力以下、すなわち一つの地球で暮らすということである。世界中の人々が日本人と同じ暮らしをすると地球が二．八個必要（エコロジカル・フットプリント）だ。無論、地球は一つしかない。したがって、一つの地球で暮らすということは現在の約四割で暮らさなければならないことになる。

「一つの地球で暮らせる社会を描く研究所」を四月に東京で開所したばかりであるが、その準備会議で、失ってはならない日本の文化を色濃く残す沖永良部島の人たちは、いくつの地球で暮らしているのだろうという話になった。それは早速調べねば、ということで、二十代から八十代の方々に御協力を頂いた。その結果、一つの地球以下で暮らしている方も多く、全体でも、すでに地球一．二個で暮らしているという驚くべき結果だった。日本、いや世界が目指す憧れの暮らし方が、すでに沖永良部島にあったのだ。

なぜ、沖永良部島の人たちは低環境負荷で暮らすことができているのだろうか、生活アンケート調査を行ってみた。アンケートは、自然や家族や地域（コミュニティ）との関わり、つながり・豊かさとの関わりに関するもので、我々の研究グループが日本全体でも行っており、それと比較することで島の特徴がつかめるのではないかと考えた。

その結果、ほぼ全ての設問で日本の平均を上回る親和性を示し、特に自然やコミュニティとの親和性が特徴的に高く、自然や家族、地域とのつながりに満足し、今の暮らしを幸せに思う人たちが多くいることも明らかになった。

沖永良部島の人たちが地球環境のことを考えて暮らしているのではない。ただ、離島であるが故の多くの制約の中で、心豊かに暮らすためには、自然に生かされていることを知り、自然を活かし、自然を往なすという基本的な足場の上に、それと融合した形での家族やコミュニティの形を創り上げてきたのだろう。そして、その原理がまだしっかりと残っている結果として、豊かでありながら環境負荷の低い暮らしを生み出しているのだと思う。

四割の暮らしの話をすると、ほとんどの人が、そんな無理な、無茶な…という意見が多い。でも、島にはそれを笑顔で軽々とクリアーしている人たちがいる。本当に凄い人たちだと思うし、世界の最先端を走っていることをもっと自慢してほしい。

現在、島で進めているエネルギーの循環に加え、今後、食の循環や多機能小規模自治によるコミュニティの活性化が進めば、地球一つ以下での島暮らしも達成可能だ、そんな島に住んでいることを、心から誇らしいと思う。

略歴

一九五三年　岡山生まれ、大学では地球物理学を専攻、その後、㈱INAX（現LIXIL）で二十五年間、主に研究開発を担当（取締役CTO）技術戦略会議・環境戦略会議兼任議長を務める。
二〇〇四年　東北大学大学院環境科学研究科教授、SEMSaT（大学院環境政策技術マネジメントコース）（兼任教授）
二〇一四年　退任　沖永良部島へ移住　地球村研究室を起業
二〇一九年　サステナブル経営推進機構（SuMPO）設立　理事長
二〇二四年　One Planet Research Lab.（OPaRL）設立　研究代表

「学校を変える」とは

羽月小（姶伊）　村上善成

学校づくりを「守・破・離」で考えること。「自分の感じた違和感」を大切にすること。この二点をこれまで仕えた上司や先輩校長から教えられた。本校に赴任して二年目、昨年度の学校経営を振り返りながら、今年度に向けて改善したことをまとめてみた。

一　児童の命を守る

毎年、年度始めに、「学校では先生方が全力でみんなの命を守ります。そして、命の守り方も教えます。みんなは自分の命を自分で守れるようになりましょう。」と児童に話している。豪雨や積雪、猛暑等の気候に応じて気を付けること、通学路の状況や登下校の様子から気付いたこと等、日常的に、児童一人一人に考えさせながら、安全・安心な生活を送れるようにしている。また、どこの学校でも、学校行事として、避難訓練等が地域の状況を基に計画されている。

〔違和感〕

赴任直後の四月、火災想定避難訓練、交通安全教室、不審者対応訓練と、毎週「命の学習」についての校長講話が続いた。話を聞いている児童も繰り返される訓練に疲れている。最も大切な学校行事であるにも拘わらず、命を守る本物の力となっていない。

【改善】四月は交通安全教室のみ。

入学間もない一年生には横断歩道の渡り方は重要である。また、学年が上がり、自転車に乗ることを楽しみにしている児童もいる。

不審者対応訓練は夏季休業前の七月に、火災想定避難訓練は二学期後半に設定した。

二　保護者とじっくり語る

コロナ禍で保護者との距離が開いたように感じる。苦情は情報とは言うが・・・。

〔違和感〕

家庭訪問は玄関先で立ち話。教育相談には語りたい保護者が来ない。

【改善】家庭訪問をなくす。

児童の生活環境や危険箇所、通学路は把握しておく必要があるため、四月に実施していた家庭訪問期間に、自宅の場所だけは確認するようにした。また、七月に全保護者対象の教育相談を実施した。十月と二月には、希望者による教育相談期間を設定したが、担任からの希望もあることを保護者へは伝えている。

三　運動会

〔違和感〕

感染症対策、熱中症対策で午前中開催の運動会が数年続いている。お弁当のない半日の開催でよいのか。

【改善】秋半日開催から春一日開催へ。

保護者からは、「お弁当を作るんですか？」と嫌そうな声と「お弁当あり、楽しそう。」と両方の声が上がった。結果、弁当を囲む児童の笑顔に会場全体が癒されていた。

四　業務改善について

前述のことは業務改善にもつながると考え、本年度大きく学校改革に取り組んでいる。

〔違和感〕

職員の業務改善への意識が高まらない。職員個々の家庭状況や経験、実態もあるが、時間に追われ、自己研修の余裕がない。

【改善】毎週水曜日、自己研修の時間を設定。

朝は健康観察のみで授業開始、清掃なしとし、六校時終了後に八十五分の自己研修の時間を設定した。この日には、職員研修や部会等をもたない。また、ＰＴＡの会合等も入れないよう保護者へも依頼した。まだ定着したとは言えないが、職員の仕事の進め方や時間の使い方に減り張りができてきたように感じる。（現在、児童の方が意識が高い・・・）

歴史と伝統のある学校であり、過去の教育課程を見ると、歴代の校長先生方の学校経営へのこだわりが伝わってくる。積み上げたよさを生かしながら、覚悟して学校を変えていきたい。

一つのチームとして進む

油久小（熊）　池田陽子

一　はじめに

学校の現状も一校一校違うのだということを、異動するたび、他校の先生と語るたびに実感する。それは、当たり前だけれども、学校の現状が違えど、どこの学校でも共通して大事なこと、その一つは、学校がチームとして、新たなことも取り入れ変化しながら進んでいくということではないかと思う。

二　一つのチームとしての職場作り

一つのチームとなるためには、共通の目標をもつこと、職場の心理的安全性が確保された上で職員それぞれが強みを生かせることが重要であると考える。

㈠　共通の目標をもつ

全職員が共通の目標をもつということは校長としてのビジョンが明確に伝わっているということである。そのために、グランドデザインをもとに、自分の考える学校について繰り返し伝えていくことが大切だと思う。年度初めの学校経営方針説明で、職員会議や研修で、職員朝会で、めざす学校や児童の姿、本校の課題に対する取組の方向性について職員に伝え、職員と語っている。

㈡　職場の心理的安全性

職場の心理的安全性が確保されているということが、職員が力を発揮できる環境につながると考える。校内安全衛生委員会のための職員アンケートに、発言のしやすさ、協働体制や人間関係に関する項目を設けたり、服務研修でハラスメント防止やよりよい人間関係作りのための内容を扱ったりしながら、心理的安全性の確保に向けて取り組んでいる。管理職の在り方が職場の雰囲気に与える影響も小さくないと考えることから、我が身を振り返ることも多い。

㈢　職員の強みを生かす

職員一人一人に個性があり得意もある。それを強みとして生かせることでチーム力が上がる。その点では、本人が思う強みと校長がとらえているそれとを摺り合わせることから始めた。そして、日常の個別指導や業務に関するフィードバックにつなげることで、一人一人の意欲向上に努めている。

三　新しいことに挑戦するということ

社会環境が変わり、学校の現状が変わる中で、教職員が変化を前向きに受け止め、課題解決に向け取り組む時に大切なことは、現状維持をよしとしないことだと考える。今年度の個人テーマを、「一行事一改善」とした職員がいる。また、昨年度の自身を振り返り、改善策として今年度の目標を具体的に立てた職員もいる。「取組として特に問題はなかったので同じで」ということをよしとせず、新しい発想での改善・取組を積極的に進めている。このような職員が周囲へも影響を与えてきていることを感じている。

「不易と流行」という言葉のとおり、変わらず大切にするべきことはあるが、変えていくことを恐れないという姿勢は大切にしたい。そのためには、職員間でのアイディアの共有や忖度のない自由な意見交流が必要だ。学び続けることは重要で、短期研修をはじめとした校外での研修の場などにもどんどん出ていくよう促している。

四　おわりに

各校でそれぞれの実情に応じた取組を校長の個性を発揮しながら進めていらっしゃると思う。

職員室の壁に大きな掲示板を設置し、アイディア共有のためのホワイトボードを貼り付けたり、職員会議の校長指導の中にロールプレーイングを取り入れたりと試行錯誤の日々であるが、学びながら自身を最新化していく姿勢をもった校長でありたいと思う。

わが校の

学校経営

九年間を見通した義務教育学校の よさを生かす学校経営を目指して

悪石島学園（郡）　林　純一

一　はじめに

本校は、鹿児島市から南へ約三〇〇キロ。十島村の北から五番目の有人島で人口は八〇名余りの悪石島にある義務教育学校である。

今年度は小学校にあたる前期課程九名、中学校にあたる後期課程六名の計十五名の児童生徒が在籍している。これに対し、常駐ＡＬＴを含む十三名の職員で指導を行っている。今年度から特別支援学級を開設し、これまで以上に充実した個別対応が図られている。また、悪石島には、ユネスコの世界無形文化遺産に登録された仮面神「ボゼ」をはじめとする様々な行事があり、学校も連携しながら、活動を行っている。

二　学校経営の基本方針

校訓は「やさしく（友愛）かしこく（向学）たくましく（克己）」、学校教育目標は「目標に向かい互いを認め合える心豊かな児童生徒の育成」、キャッチフレーズは「**あ**かるく　**く**じけず　**せ**いいっぱい　**き**ぼうにむかって」である。人権尊重を基底とし、義務教育学校のよさを生かした九年間の連続した学びを全校で意識し、組織として一人一人のよさを伸ばし、九年生（中三）で自信と誇りをもって「島立ち」をする児童生徒の育成を目指した学校経営に努めている。

三　本校の取組

㈠　義務教育学校のよさを生かす教育活動

本校は、全国各地からの山海留学生も五名ほどおり、それぞれに課題を抱えていることも少なくない。そこで、少人数のよさを生かし、個に応じた指導の徹底を図るとともに、少人数でもできる「主体的・対話的で深い学び」のための指導法の工夫・改善を行っている。その一つとしてＩＣＴ機器の積極的活用や小中の職員による授業の相互乗り入れなど、それぞれのよさを生かした授業づくりの実践を行い、小中職員の互いの授業改善を行っている。

㈡　特別支援教育の充実

前述したように、今年度から知的特別支援学級が開設された。新一年生ということもあり、未知のことも多かったので、全職員での研修を重ねるとともに、保護者との連携を密にし、充実を図っている。今年度から赴任した職員の中に指導の長けた職員がいるため、さらに実践的な充実が図られている。また、研修を全体で深めたことにより、これまでなかなか上手くいかなかった留学生への指導も見方を変えることができるようになり、指導法の充実にもつながっている。

㈢　職員の心身の充実

「自分の子供を通わせたくなる学校」を職員間の合言葉に業務改善と働き方改革に取り組んでいる。本校はサイクルが短いために職員の入れ替わりが激しい。そこで、各種行事の見直しを進めながらも、次の担当者が苦労しないような業務を効率的に進めるための取組とデータの蓄積を行っている。

また、地域との繋がりが非常に重要になるので、ミドルリーダーを活用し地域行事への参加呼びかけも行っている。魅力ある行事も多く、また、島民にとっては職員が大切な島の担い手でもあるので、無理のない範囲で地域行事を楽しむことが、心身の安定にも繋がるのではないかと考える。

四　おわりに

極小規模校として、課題は少なくない。今年度から始まったばかりの義務教育学校であるので改善の余地も多々ある。また、地域と密着した学校において、地域と学校の距離感が微妙なバランスの上に成り立っていることをひしひしと感じることは多い。

しかし、来たくてもすぐには来られないすばらしい魅力あるこの学校で多くの力を借りながら、学校経営に携われることを光栄に感じる。これからも児童生徒、地域、保護者、および職員のために、微力ではあるが、笑顔で精一杯努力していきたい。

わが校の

学校経営

自ら考え、意欲的に活動する子供の育成

節田小(大)　池田　誉

一　はじめに

本校は奄美市街地より北東へ約三十キロメートルの海沿いに位置し、奄美大島の空の玄関口「奄美空港」の近くにある全校児童三十四名の小規模校である。

学校教育目標は、「ふるさとで、体を鍛え知を磨き、夢に向かってたくましく生きる子供の育成」である。昔ながらの伝統を継承しつつ、子供たちが自分の将来の夢を実現させることができるように様々な教育活動に取り組んでいる。その活動の一端を紹介したい。

二　取組の実際

㈠　ボランティア活動

毎週月・水・金の朝に清掃活動に取り組んでいる。朝の八時から十分間程度の活動であるが、早めに登校した子供の中には八時前から率先して取りかかる子供もいる。活動内容は、校庭の掃き掃除や草取り、玄関や廊下、靴箱の掃除等であるが、学年や係で仕事の分担があるわけではなく、上級生が下級生に声をかけたり、近くにいる人と相談したりしながら活動している。職員も、できるだけ一緒に活動するようにしているが、活動の中で指示を出すことはあまりしない。活動を見守り、最後まで見届けることを心がけ、学級や全校朝会などで労いの言葉をかけたり、ボランティア活動の意義について考えさせたりしている。

㈡　節田アマンディ太鼓

奄美の郷土芸能の中の一つに「六調」がある。その「六調太鼓」が叩けるようになりたいという願いから、節田アマンディ太鼓は誕生したといわれている。平成元年度の学習発表会で初めて披露され、それから三十年以上続いている本校の伝統的な活動で、三年生から六年生までが総合的な学習の時間を使って練習に取り組んでいる。職員が指導することになっているが、人事異動や校務分掌の関係で細かい指導が難しい年度もあるので、子供同士が教え合ったり、上級生が下級生に教えたりしながら、長らく受け継がれてきている。職員は、全体的な指導や外部イベントに参加する際の保護者との連絡・調整を行っている。

㈢　学習の場で

本校は昨年度まで二年間にわたって地区の指定を受けて指導法改善の研究に取り組んできた。

学習指導要領に基づいた子供の資質・能力の育成に向けて、「主体的・対話的で深い学び」が実現できるように、教師に求められる役割について職員同士で研修を深めることができた。

今年度は、「教師主導」で進められる授業が減り、子供が解決の方法を自分なりに選択・判断して進める授業が多く見られるようになってきていると感じている。

三　おわりに

これからの時代は、学びを人生や社会に生かそうとし、未知の状況にも対応できる資質や能力を育てていくことが求められている。

本校においては、これからも「教える」や「指示をする」ではなく、子供に活動を「委ねる」そして、「サポートする」ことを強く意識していきたい。さらに、子供自らに考えさせる経験を多く積ませ、自信をもって意欲的に活動できる子供を育てていきたいと考えている。

「生涯にわたって学び続ける」地域の特産物から育む郷土愛

黒神小（市）　冨　永　章　文

一　はじめに

本校は、桜島の北部に位置し、昭和火口から二km弱のところにある鹿児島市で唯一のへき地の小学校である。本町では、人口減少が進んでおり、令和六年四月現在は、世帯数五十三戸・総人数七十八人と各地域での活動が難しくなっている。校区は、黒神町の塩屋ヶ元、宇土、浦之前、園山の四地域であったが、高免小休校（平成五年）に伴い、高免町（世帯数六十二戸・総人数百十四人）も含めた校区となり、小・中学校の行事等には、この五地域で組織された地域コミュニティ協議会も参加している。

令和八年度、桜島の小中学校七校が一つとなり、鹿児島市初の義務教育学校「桜島学校」の開校を予定している。

二　本校の取組

桜島では、その土壌を生かした特産物を数多く生産している。ギネスブックにも認定されている世界一重い大根「桜島大根」をはじめ、桜島小みかん、ビワ、椿油等が広く認知されている。このような恵まれた環境の中、本校では、「生涯にわたって学び続ける」を目標に、地域素材を活用して郷土に誇りをもたせる取組を実践している。

三　取組の実際

地域が誇る特産品の生産から販売までを学習し、生産者の苦労や工夫、特産品が広く認められている理由を学んでいる。そして、学習を通して郷土を愛する心や自分のキャリアについて考え、生涯にわたって学び続けることのよさに触れることができるように、取り組んでいる。

（「郷土教育」は☆　「キャリア教育」は◎で表記）

㈠　桜島大根の生産から出荷・贈呈式まで

世界一重い大根として認知されている桜島大根は、重いもので三十kgになる。しかし、自分たちが育てても十kg程度にしか育たない。そこには、生産者の土づくりや肥料に工夫がある。

◎①畑の草刈りや肥料やり・耕運
◎②種蒔きの時期や数、植え方、間引きの時期
◎③収穫までの手入れや追肥
◎④収穫の仕方
☆⑤地域・子ども食堂へ贈呈
☆⑥感謝の手紙作成
◎⑦収穫・青果市場への出荷
☆⑧世界一重い桜島大根コンテスト出品・表彰
◎⑨青果市場の仕組、競り見学や体験
☆⑩鹿児島市長への贈呈式参加

㈡　椿の実から椿油販売まで

椿は、火山灰に強く、桜島の土壌に合った植物とされている。その実から搾油される椿油は、高い保湿効果を持ち、肌や髪に浸透して乾燥を防ぎ、しっとりとした潤いを与えてくれることで親しまれ、桜島では昔から生産されている。椿は、地域の方々によって学校や地域の集荷場、個人のビワ園等に植えてくださっている。

◎①椿の実拾い（十月）
◎②拾った実を一か月程、天日干し
◎③椿油実絞り体験
◎④椿油の瓶の煮沸作業とラベルづくり
◎⑤椿油の瓶詰作業
◎⑥山形屋前でのブース販売準備
☆⑦購入者への感謝の手紙作成
☆◎⑧椿油の販売体験（山形屋前）

桜島大根や椿油を手にする方々への感謝の手紙には、書いた児童の名前が記してあり、手にした方々から、毎年、食べたり使ったりした感想や励ましの言葉が遠くは東京や千葉から手紙で送られてきており、児童にとって郷土のよさを実感できる活動となっている。

四　おわりに

地域の方の特産品への取組や姿勢、特産品の評価を知り、学ぶことによって郷土に誇りをもち、生涯にわたって学ぶことのすばらしさを感じるとともに、自分のキャリアを考えるよい機会となっている。これからもこれらの学習を支えている保護者や老人クラブ、地域の方々に感謝し、未来の桜島の子どもたちが、受け継いでいってくれるよう取り組んでいきたい。

地域を学び、地域とともに生きる
陵南の生徒の育成

陵南中（姶伊）　有村哲郎

一　はじめに

本校は、溝辺中学校玉利教場として発足、その後分離独立、玉利中学校として発足し名称変更や移転を経て、創立七十周年を迎えた。校区は、霧島市西部にある旧溝辺町の南東部に位置しており、標高二百八十m前後の十三塚原台地及びその周辺地域であり、東に霧島連山、南に桜島を望み、雄大な景色を見ることができる場所である。また、地域はお茶栽培など農業が中心であったが、鹿児島空港が隣接しており、空港が昭和四十七年に開港、五十一年に高速道路が開通したことにより、関連産業が増え混住化が進んだ。ここ数年で学校周辺を中心に都市計画が進み、新しい住宅が次々に建ち、活気に満ちた校区である。そのため、地域のことを知らない生徒が増えてきている現状がある。本校で取り組んでいる地域を学び、地域とともに生きる陵南の生徒についての取組を紹介したい。

二　取組の実際

㈠　霧島ジオ学習

日頃生活している場所が霧島ジオパークに指定されており「火山とは何か」を考え、活火山の麓に生きてきた人々の生きざまや文化を知り、体験学習や探究活動を通して霧島ジオパークの価値や意義についての理解を深め、郷土霧島の自然や歴史、文化を伝える活動を行う。

ア　霧島市ジオパーク推進課から講師を招き、講話や実験

イ　ジオパーク体験学習

・　えびの高原で、学級毎に散策やガイドの方から話を聞く。

ウ　ジオパーク発表

・　一学期授業参観での発表

㈡　平和学習・戦跡フィールドワーク

修学旅行で長崎を訪れ平和学習を行う。さらに、地元の過去の歴史を学び身近な戦争遺跡を巡ることで、平和への思いを深め郷土への関心をもたせる活動を行う。

旧溝辺町には旧海軍航空隊第二国分特攻基地があり、多くの若者が特攻に出撃した地でもある。霧島市役所横川支所や有志の方々の協力をいただき、訪問場所での解説を行っていただいている。

ア　長崎の原爆被災者二世の講話

・　昨年度までは、隣町の加治木空襲の講話を実施していたが、高齢のため実施が難しくなり、本年度より原爆被災者二世の講話に変更

イ　長崎市の訪問（自主研修の実施）

ウ　地元の戦跡フィールドワーク

〈訪問地〉

旧海軍航空基地滑走路跡、旧海軍航空隊第二国分特攻基地、旧海軍第一国分航空基地・発電所跡、加治木空襲跡・受難学徒の碑（加治木高校）、特攻鎮魂碑・資料館、大隅横川駅　など

㈢　探究活動発表会

職場体験学習を通して感じたことから、地元である陵南校区が抱えている課題を見出し、現状把握と課題把握の力を身に付けさせ、陵南校区を住みよい街にするためのアイデアを考えさせる。

ア　職場体験学習（二十一事業所）

イ　まとめ

ウ　発表

保護者や霧島市観光PR課を招き発表会を実施した。発表では、①イベント交流を企画、②企業誘致、③駅の設置、④ホテルやショッピングモールの誘致、⑤三世代が集える娯楽施設、⑥観光誘致、⑦スポーツ施設などの提言を行った。

資金調達や土地取得など、中学生が進めていくには解決が難しい提言や課題も出された。また、鹿児島空港があり、多くの人が集まっているが、溝辺の地が観光の際に通過点となっており、溝辺周辺での観光もしていただけるようにミニマップを作成するなど、中学生ならではの可能な提案もあった。発表会では、霧島市観光PR課や溝辺支所長に講評をいただいた。

三　おわりに

平和学習を進めていくうえで講師の方々の高齢化が進み、講師選定も年々難しくなっている現状がある。また、物価高騰によりバス代が高騰し、さらに、運転手の拘束時間など様々な課題が絡み、校外での体験学習の難しさが表面化してきている。本校では、市役所等の協力を得て、校外体験学習をなんとか進めることができている。感謝の限りである。

今後も陵南中学校の教育を充実・発展させるために様々な活動の実践を重ね、未来の担い手として主体的に学び、思いやりをもって行動できる心身ともに健やかでたくましい陵南の生徒を育成していきたいと考える。

心に残るひとこと

「淡々とやる」

向花小（姶伊）福　元　茂　人

かつて、大勢の方に御迷惑をおかけすることがあった。不勉強さゆえのミスであった。事態を収拾していくために行うことは、情報収集や膨大な資料の作成等あまりにも多く、終わりが見えない状況であった。上席からの指導や関係機関との連携においても、当然、厳しい指導をいただきながらの職務遂行である。焦りと不安で押し潰されそうな気持ちになった。そのとき「よかか福元、淡々とやっていったど。」ある方から、その言葉を掛けていただいた。それは、今をどのように切り抜ければよいかという方法を示していただいたように感じた。不安の底にある自責の念を「ひとまずこの感情は横に置いてもよいのだ。」と、すうっと割り切ることができた。

どの職においても、「淡々とやる」という言葉に救われてきた。私にとっての「淡々とやる」という言葉の意味は、「負の感情に押し潰されそうになる自分の視点を、やるべきことに向け直し、整理し、それらのこと一つ一つに集中して取り組んでいく。」という意味である。

特に校長職を拝命してからは、考え、迷うだけ迷った末に事を進める段階になったとき、この言葉を唱えていることが多い。「淡々とやる」の意味が「後は、迷わず惑わされず実践するのみ」の意味になっている気がする。いずれにしても、かつて苦しい状況のときに掛けていただいた言葉は、様々な経験の中で、呟く度に実感と説得力を伴った言葉として、私の大切な言葉となってきた。

しかし、忘れてならないのは、その時々に出会った方々の支えである。「淡々とやる」その土台にどれだけ温かい言葉があっただろうか。切羽詰まった状況で、「大丈夫、大丈夫。」と、気持ちを落ち着かせてくれる同僚や、希望を語ってくれる多くの仲間に助けられ踏ん張ることができた。これからも、そうであろうことに感謝したい。

「明日できることは明日」

伊子茂小中（大）福　元　親　視

初任の時、日々授業をこなすことで精一杯の一年目、目標とする先輩の影響を受けるようになった。その先生は、いつも子供たちに囲まれ、保護者や同僚からも信頼されている。とにかく授業がうまい。「見に来ていいよ。」と言われ、何回も参観するたびに、その指導力はもちろん、様々な教師としての技術に驚き、あこがれる存在に。とりあえず何でもまねをしていた。

先輩にあこがれる姿の一つに、仕事が早いことがあげられる。職員会議で資料を見ながら発言する先輩はかっこよく見えた。そこで、指導案や通知表も何日も前には取り掛かり、企画委員会への資料など早めに提出していた。今とは違い様々なものが紙媒体であった時代、職朝での連絡さえも一枚プリントを用意して発言していた。そのため、放課後は、明日の教材研究を行い、初任研の授業の準備、会議資料の作成と、「早め早め」と、言い聞かせながら、先々の仕事も次々に済ませていた。ただ初任なのでなかなか進まず夜遅く帰る日々を送っていた。

そんなある日、その先輩がひょっこり教室に顔を出し、「何しているの。」と、声を掛けてくださった。私は、先輩にほめてもらえるだろうと「提出する資料を作っていました。」と、得意気に返事をした。ところが、期待していた反応とは違い、「締め切りは、まだまだ先だがね。明日できることは明日。早く帰って休むことも大事だよ。」と、言われた。私がいつも遅くまで残っていることや最近疲れている様子から声を掛けてくださったとのこと。「先生が元気だと子供たちも元気になるんだよ。健康が一番。」と、言われ去って行かれた。その姿がとてもかっこよく、今でも時々懐かしく思い感謝する。

先輩から学んだことはたくさんあるが、この言葉は今でも大切にしている。働き方改革により居残る先生方が少なくなってはいるが、無理をしないように「明日できることは明日。」と、先生方に声を掛け続けていきたい。

極めた人ほど謙虚、実った稲穂のように

海星中（北）　木之下　悦　朗

初任者の時でした。仕事が忙しく理想と現実のギャップに苦しんでいた時、周りは経験豊富で教科指導・生徒指導も校務分掌もてきぱきとこなす先生ばかりでした。自分に自信がなくなりかなり悩んでいました。そんなある日、教頭先生が語りかけてくれました。

先生、自信はこれからつけるもの。でも、自信がついたからといって、威張ったり、自慢したりしてはだめだよ。一流のアスリートは、そんなことしないよね。「極めた人ほど謙虚、実った稲穂のように」と言われました。そして、教頭先生は続けてこう言いました。「だから先生はそれでいいんだよ。それが先生のいいところだから。くよくよすることはないんだよ。」

私は、こんな私だけど自分を認めてくれる人がいたということを知り、嬉しくなりました。こつこつと教師として精一杯頑張るようになり、周りの人からも、頼りにされ、アドバイスをするところまで成長しましたが、事あるごとに、昔の自分を思い出し、どんな人にも謙虚に、職員の気持ちを汲んだ言動をとるようにしています。あの一言がなかったら今の自分はなかったかもしれません。

現在もこの言葉を戒めにして、今でも、常に己を極めようとしますが、すればするほど、力量のなさを痛感させられます。それでも、完璧を求め、今日も何事にも真摯に向き合い、努力を続けています。

おいあくま

宇都中（隅）　迫　田　尚　久

教諭時代、剣道部の顧問として生徒と一緒に講習会に参加しました。自分が中学時代にライバル校を指導されていた方が校長になり、複数校の中学生に指導してくださいました。剣道では、練習後に指導者から子供たちにありがたいお言葉をいただくのが常で、その際に聞いた言葉が「おいあくま」です。これは、五つの言葉の頭文字をつないだものです。初めて聞いた私はその言葉を気に入り、学級経営でも使えそうだと思い調べてみました。すると、結構有名な言葉で、出典も諸説あり。三種類の言葉を、使用する人がその時と場にあったものを組み合わせて使っているようです。それでは、紹介します。

㋐　恐れるな　怒るな　驕るな
い　いじけるな　急ぐな　威張るな
あ　諦めるな　甘えるな　焦るな
く　挫けるな　腐るな　悔やむな
ま　負けるな（相手に・自分に）　迷うな

この言葉を知って以来、よく校内掲示に利用したり、学級通信で紹介したりしました。

校長になった今、自戒の言葉として、㋐は驕るな、いは威張るな、あは焦るな、くは悔やむな、まは迷うな、がしっくりきています。

皆さんは、どの言葉を選ばれますか。

これとほぼ同じ言葉に「あおいくま」があります。ものまねタレントのコロッケさんが、幼少期に母親からいつも聞かされていた言葉として有名になり、青いクマがキャラクター販売までされています。あは焦るな、㋐は怒るな、いは威張るな、くは腐るな、まは負けるな、です。

最後に、「おいあくま」には「さあほとけ」というセットになる言葉もあります。ネットで調べるとすぐに見つかりますので、主体的に検索されてください。

ある日の校長講話

名前に込められた願い
みんな素敵な名前だね！

皇徳寺小（市）有　村　暢　高

今の季節、雨が多くてじめじめしていますね。夏が来る前のこの季節を何と言うのかな？そう、「梅雨」ですね。（ホワイトボードに書きながら）漢字では、こう書きます。梅の雨。読み方難しいね。難しい読み方と言えば、わたしたちの名前も難しい読み方が多いです。

有村校長先生は、小・中学生の頃、自分の名前が好きではありませんでした。名前の「暢高（まさたか）」を正しく呼んでもらえなかったから。始業式の日など、先生から「のぶたか」とか「ようこう」とか呼ばれていました。クラスの友達が正しく名前を呼ばれ、返事をする中、「自分の名前は正しく言われないだろうな。いちいち訂正するの面倒くさいなあ。」という思いから、自分の名前が好きになれませんでした。「ようこう」と呼ばれた時には、ボクシングの世界チャンピオンだった具志堅用高選手の口癖「ちょっちゅねえ」と返事をすることもありました。

でも、高校生になり、自分の「暢高」の漢字の意味を辞典で調べた時に、思いが変わったんです。「暢」の字には「のびやか」という意味が。「高」の字には「気高い」という意味が。

「のびのびと、気高く高らかに生き抜いてほしい」という親の思いがひしひしと伝わってきたんですね。両親の思いや願いが分かってから、自分の名前「暢高」が大好きになったんです。

みなさんの名前にも、家族の思いや願いが込められているんじゃないかな？自分の名前に込められている願いを知っている人、手を挙げてみて？ふうん、なるほどね。すれ違う時に、「あなたの名前にはどんな願いが込められているの？」と聞きますね。知っている人は、「こんな思いや願いがあるんです。」と教えてくださいね。

みなさん一人一人の名前に、大切な願いが込められています。素敵な名前です。自信をもってね。誇りをもってね。

有村校長先生のお話は、「願いのこもった名前」、「素敵な名前」のお話でした。

教室に向かう際は、ロックグループ、ゴダイゴの♪「ビューティフル・ネーム」を聴きながら向かってください。

♪ミュージック、スタート！

弁論大会を終えて

立神中（南）大　野　　暁

まずは発表を行った皆さん、本当にありがとう。今日の発表まで、どうすれば相手の心に届くように自分の思いを伝えられるか、何度も文章や構成を考え、スピーチの練習を繰り返してきたことと思います。また、人前で発表をする機会は人生の中でもそう多いことではありません。緊張したと思いますが、どの発表者も堂々とした態度で、それぞれの主張がしっかりと伝わってきました。

さて、他の皆さんも弁論文作成に取り組んだことと思います。皆さんは、弁論文を書くときにどのような方法をとりましたか。今は人工知能が文章等を作成する時代になりました。例えば、「世界の環境問題に対する取組を教えて」と入力すると、すぐに弁論に使えるような文章が出てきます。しかし、それをそのまま発表しても、相手の心に深く届くでしょうか。私は、残念ながら心に届くものではないと感じています。なぜなら、自分自身の思いや考えといったその人にしか感じることができない感情が表現されていないからです。私たちにこれから求められるものは、人工知能では書くことのできない文章を書く力を高めることではないでしょうか。そのためには、世界にただ一人の自分が体験の中でいろいろなことに気付き、その時の気持ちや考えたことを書くことが大切です。これは、絶対に人工知能には書けないものなのです。

夏休みには、作文等の課題が出されます。ぜひ自分の体験を基に、その時の感情や考えたことがたくさん表現されている文章を書くことに挑戦してもらいたいと思います。あなたになれるのはあなただけです。

自然豊かな屋久島に誇りを持とう

屋久島高　山口　悟

本日で一学期が終了します。勉強や部活動、学校行事などに主体的に取り組み、充実した日々を過ごせたのではないでしょうか。

さて、私たちが住む屋久島は自然豊かな島です。九州最高峰の宮之浦岳や樹齢千年を超す屋久杉などがあり、ヤクシマザルやヤクシカなどが棲息しています。また、ウミガメの産卵地としても有名です。屋久島に来るウミガメはアカウミガメとアオウミガメの二種類です。そのほとんどはアカウミガメで、屋久島は北太平洋でその最大の産卵地となっています。

屋久島で生まれたアカウミガメは、黒潮に乗ってはるか遠くアメリカ西海岸やメキシコ付近まで泳いで行き、そこで約二十年間も過ごすそうです。成長すると北赤道海流に乗って東シナ海付近へ行き、産卵の時期になると屋久島へ戻ってくるのです。永田浜の砂は花崗岩が砕けてできたもので、穴を掘りやすく水はけがよいので産卵に適しているとのことです。

先日、永田浜のウミガメ観察会に参加してきました。灯りをつけるとウミガメは上陸してこないので、真っ暗な中を歩きました。ウミガメは上陸して産卵場所を定めると体全体が沈むくらい砂をかき出し、更に後肢で器用に深さ六十センチの巣穴を掘って産卵します。ガイドさんがウミガメの後部を赤いライトで照らしてくれました。卵管から卵が産み落とされる様子は、とても神秘的でした。産卵が終わると巣穴を埋め、更にどこに卵があるかわからないように砂をかけ、海へ帰っていきました。ウミガメが命を繋ぐために必死に頑張っている姿を見てとても感動しました。私もウミガメに負けないよう、もっと頑張ろうと思いました。

明日から夏休みとなりますが、時には自然を観察してみてはいかがですか。自然の中に何か生きるヒントが隠れているかもしれません。そしてこの素晴らしい自然豊かな屋久島に誇りを持ち、大切にしていってほしいと思います。

話のひろば

目指せ！〇〇博士 ～世界に一つだけの〇〇～

粟ヶ窪小（南）
吉満昭代

次の三つのヒントから想像する植物は？

一　自家不和合性（他品種の花粉でなければ受精しにくい）

二　種子の直径は約一～二cm

三　鹿児島県が栽培面積・生産量全国第二位（二〇二一年）

答えは、茶である。タイトルの〇〇には、「お茶」が入る。日常茶飯事という言葉のとおり、ごくありふれたこととして飲んできた「お茶」が、鹿児島県一の茶どころに赴任して三年目、今や私の興味関心の大半を占め、挑戦心や夢をかきたてている。

さて、一つ目のヒント、茶のもつ自家不和合性という性質と繁殖方法について触れたい。現在、茶は挿し木によって繁殖している。従って茶園には挿し木で繁殖した苗を植えて育てている。昔は種子を蒔いて繁殖させていたが、茶は自家不和合性（他品種の花粉でなければ受精しにくい）であるため、できた種子は遺伝的に雑種となり、発芽した茶樹は株ごとに形質が異なり、品質が安定しないという問題があった。そこで、昭和に入って挿し木法が実用化し、形質が安定した苗が作られるようになり、茶樹の品種化が進んだという流れがある。

本校には総合的な学習の時間に「目指せ！お茶博士」という単元があり、本年度から三・四年生十四名が種子からお茶をつくることに初挑戦している。雑種になることによる問題点は、学校では問題点ではない。違いを認め、世界に一つだけのお茶づくりを楽しめるという魅力と捉えた。五月中旬、茶畑が広がる風景を見ながら成長する子供たちもお茶の種子を見たのは初めてだった。お茶の種子は茶色で見た目はどんぐりのようだ。初めて見る種子に興味津々、じっくりと観察し合いスケッチしたあと、自分の植木鉢に丁寧に種子を植えた。その後、約一か月で発芽を始め、八月に入って発芽したものもある。成長した葉の形も細長いもの、丸っこいもの、お茶らしいギザギザがないものもある。違いを楽しみ、種子から栽培することのおもしろさを子供たちと楽しんでいる。最近、クルッと丸まった葉の中にハマキムシという咀嚼害虫が現れた。さあ、どうする？それぞれのお茶博士を目指してほしい。

人生を変えた素敵な出会い

西陵中（市）
山下信久

私の心の師匠的存在の人、須永博士さん。この人との出逢いは、私が大学一年時、九州一周バイク一人旅を行ったときです。旅も終盤になった頃、熊本県小国町を通過したとき、トイレ使用のためだけに立ち寄った施設でしたが、そこには多くの作品が飾られてあり、トイレに行くことも忘れ、一時間余り、作品に込められた言葉の「優しさ」「強さ」「重さ」などをズシズシと感じながら、「相田みつをさんのカラーバージョン的だな。生きていたら会いたかったな…。こんな素敵な作品を創る人って、どんな人生を歩んだのかな～？」と、周辺の人に語り掛けていたら、背後から私の肩をポンポンと叩く人がいました。「僕が、須永ですが！」。その時から今年で四十一年目、お付き合いをさせていただいている八十一歳の方です。

須永さん自身、高校・就職直後の頃、生きる希望のもてない時期があったそうで、「俺は、何の役にも立たない人間だ。」と、思いながら、ただ惰性で生きていたそうです。生きていても意味がない。何もできないと、絶望のどん底で、雨の鎌倉へ行き、鏡に映るびしょ濡れの醜い自分の姿を見て、「俺の人生、何もなかったな。誰も助けてくれなかったな…。」と、つぶやいた瞬間、心の底から湧き出てきた言葉があったそうです。「誰も助けてくれないぞ！助けてくれるとしたら、自分自身だ！」そうか、今まで誰かに頼って生きてきた。よし、今から自分の力で、この弱い自分を、必ず強い人間にしてみせる。そこから、自分への挑戦、人生の挑戦への旅が始まったそうです。そして、夢ができたそうです。「日本一の絵描き、詩人になろう。」と！。自分のように、寂しい思いをしている人に、優しい気持ちで接していこうと。

旅をすると、多くの人と出逢い、自分よりももっと苦しい状況の中で、歯を食いしばり頑張って生きている人に数多く出逢ったそうです。旅の経験や、素晴らしい出逢いが作品の源となり須永さん自身の生きる力にもなっていると…。

生徒たちのやる気を奮い起こさせるきっかけに、本校でも講演会を実施しようと計画中です。

「笑うから楽しい」

大島特支　井上隆司

「あんさんは、運がよろしいですか？」松下幸之助は採用面接の最後に必ずこう尋ね、「自分は運が悪い。」と、答えた人は、どんなに学歴や試験の点数がよくても決して採用しなかったという。

「自分は運がいい。」と、答えた人も、実際は、それまで生きてきた中では、ずっといいことばかりだった人などいないはずである。ある人が交通事故に遭って大けがで入院したとする。ほかの人からは、「運が悪い。」ように思える。しかし、本人は、けがをして仕事を休まなければならなかったおかげで、普段はできない自分を見つめ直す時間をもつことができたから「運がよかった。」と、言ったとしたらどうだろうか。大けがをしたという事実は変えられない。要は、そのことをどのように捉えるかということである。

同じ現象が起こっても、見方が変われれば見える景色も変わる。ある年の卒業式の日、その日は雨だった。わたしは、せっかくのめでたい門出の日なのに、雨なんて縁起が悪いなあと思っていた。ところが、式を始める前に進行係の先輩教師が、「昔から鹿児島では「島津雨」といって、めでたい日に雨が降るのは吉兆とされています。」と、紹介した。そう言われると同じ雨なのに見え方ががらっと変わってしまった。

わたしがいつも授業するときに心掛けていたのは、楽しい授業をしたいということだった。どんな平凡でつまらなそうなことでも、教師が楽しめば、子どもも楽しめる。だから、楽しいから笑うのではなく、笑うから楽しいのである。そう思ってまず自分が楽しむこと、楽しめるようにしてきた。

「人生っていろいろあるけど、楽しいよ。」とか、「自分は、運がいいよ。」と、思える前向きな子どもたちを育てることが学校の大事な使命ではないだろうか。管理職業も笑って楽しめるようになりたい。

読書案内

■曽和利光　著

シン報連相

脇本小（北）川原園　達　司

新規採用者として、社会人（教師）の歩みをスタートしたおよそ三十年前。先輩方から幾度となく言われた「報連相は大事。」という言葉。管理職になって職員に対して事あるごとに伝えてきた「報連相をお願いします。」「報連相は大切なコミュニケーションです。」という言葉。さて、職員に私の思いや考えは伝わっているのだろうか。私が欲している情報は職員から私に伝わっているのだろうか。新任校長として学校経営に当たる中で疑問がわいてきた。そんなときに書店で目にしたこの一冊。

本書の著者は、これまでに企業の人事担当者を務め、約二万人を超える就職希望者の面接を行ってきた経験をもつ。そんな著者が執筆した本書には、なぜ「まずは報連相」なのか、報連相をする側・される側へのアドバイス、報連相のバージョンアップなど、具体的な場面を想定した興味深い言葉が並ぶ。これまでの報連相を一歩進めてコミュニケーションを良好にする「シン報連相」とは何か、細かいレベルでの解説が分かりやすく、あっという間に読み進められる。一回読んだら二回目は片手にマーカーを持って、気になる言葉に線を引く。そんな読み方も楽しめる。

「『報連相』というのは些細でつまらない、『誰にでもできること』でもあります。つまらないと思ってやらないか、これくらいでコミュニケーションが円滑に進むならばやってみようと行動に移すのか。この小さな差が、ゆくゆくは大きな差になっていきます。成功者ほど腰が低く、変なプライドにこだわらず、目の前のことを泥臭くやり続け、頭を下げるべきところでは潔く下げられる。これは悠久の歴史の中で繰り返され、実証されてきたことです。」著者が最後に記したこの言葉を肝に銘じたい。

クロスメディア・パブリッシング
千六百二十八円

■樋口廣太郎　著

知にして愚
〝緩〟の精神が、奇跡を生む

野里小（隅）米　村　英　紀

私が日本人学校に勤務した際に、企業の経営者や大使館の方々と親しくさせていただいた。そして、その方々が集い、毎月行われる日本人会の理事会では、日本人会の課題の改善策について真剣で熱のこもった議論が行われた。毎月の理事会で百戦錬磨の企業の経営者がどんなアイディアを出すのかがとても楽しみであった。私は、この経験から学校は企業に学ぶ必要があると考え、企業の経営者が書いた書物を多く読むようになった。

この本の筆者は、日本初の辛口ビール「スーパードライ」を大ヒットさせ、低迷していたアサヒビールのシェアを飛躍的に伸ばす経営手腕を発揮した樋口廣太郎氏である。樋口氏は住友銀行の副頭取からアサヒビールの社長に就任している。本書では樋口氏の企業人としての価値観と、それに基づいた経営をもって成し遂げられたアサヒビールの飛躍を自ら語られている。

樋口氏がビジネスマン人生を通じて大切だと感じていることは、本書のタイトルでもある「知に溺れるな」「礼節を以て緩慢にやれ」ということである。知識をひけらかすのではなく、自分のありのままの姿、素直な気持ちをさらけ出す「愚」であれということである。樋口氏は当たり前のことでも愚直と言われるほど、とことんまでやる「愚」の部分を自分のなかに持ち合わせていたと言っている。社長自らが仕事への基本姿勢を社員に説き、徹底した社員教育を行うことで、社内に「モノにする気迫」を充満させることができた。また、指導をするだけでなく、社員の話を聞き、常に社員の立場で物事を考えた。前例にとらわれず、妥協を許さない芯のあるリーダーの姿勢がアサヒビール復活を成し遂げる原動力となったのである。樋口氏が説いた仕事への基本姿勢は「仕事十訓」「管理職十訓」としてまとめられている。特に「管理職十訓」は企業の管理職だけでなく、学校の管理職としても心に留めて学校経営を行う必要があると思う。

学校教育目標を全職員に浸透させ、やるべき事を愚直に行わなければと考えさせられた一冊である。

祥伝社　千五百円

■校長ちゃん　著
■とまと　詩・イラスト

それで、よかよか
86の愛のメッセージ

市来農芸高　米森　剛

学校経営に関する様々な書籍を読んできたとはいえ、「皆さんも多分読まれたのでは」と思うと、「どれを紹介したら良いだろうか。」と考える日々が続いていた。悩む中、今回は、どの学校種においても抱えているであろう「不登校」について取り上げた書籍を紹介したいと思う。

著者は、九州内の某私立高校の校長先生だ。この書籍は、著者が某月刊誌のコラムを三年間執筆され、その後、加筆・修正したものに、書き下ろしの新たな原稿を加えて発行されたものである。

表紙には、「入学試験で答案用紙に名前を書けば受かると言われる学校」「不登校生徒を包み込む愛の実践」「子どもはそのままでいい」と書かれている。購入したときは、至極興味が湧いたのを覚えている。

著者は、公立中学校の教員となり、その後、三十六歳の時に私立高校に教頭として着任。その高校は四十数年前は全校生徒が三人の時もあったそうだが、現在は六十～七十人の生徒数の小規模校。この高校に赴任してから自分自身が変容したと記している。

以前の学校では遅刻した生徒を怒っていた。当たり前のことだと私は考えたが、著者は遅刻しているという現象は一緒でも、家庭の経済状況、学校との地理的な問題など生徒一人ひとりが背負っている背景が異なる。遅刻した事実より、それでも子どもたちが学校に頑張ってきているということを理解できたとき、今まで自分が怒鳴り飛ばしていた子たちのことを思い、自分を悔いる涙が出てきた。生徒より強い立場にいる自分たちが頭ごなしに怒ることの愚かさが身に染みて分かったと。

できないことを嘆くのではなく、できていることを認める。ネガティブな側面ではなくて、ポジティブな側面に光を当てる。全てをこの尺度に当てはめて考えることが、現在の自分の教育観だとも。

学校の実情は異なるので一概には言えないが、生徒を導く教師のスタンスとして、一つのバイブルといえる書物と考える。気になる方は手に取って読んでもらいたい。

中村堂　二千二百円

趣味・文芸

魚の気持ちを考える

蓬原小（隅）徳田賢一

子供の頃から身体を動かすことが大好きで、落ち着きの無い幼小時代を振り返ると、恩師の皆様には随分お手を煩わせたなと反省しきりである。両親もさぞかし気苦労が絶えなかったことであろう。

これまでにいくつかのスポーツに取り組んだが、仲間に恵まれ、それなりに楽しむことができた。中でも自分史上最大の衝撃だったのはセーリング競技との出会いである。遠目で見るとゆったり進むヨットも実際は激しいスポーツである。まず、風が吹き波が立つと足場が安定しない。文字どおり木の葉のように揺れ、常にバランスを意識して体重移動をしなければならない。何より六畳程の面積がある帆をロープで操作する筋力が必要である。風はもちろん、波や潮流の微妙な変化に対応し、自然の力を推進力に変える。風の力でこんなにも速度が出るのかと驚かされた。同じ風速でも、気温差によって冬と夏では風の持つパワーが違う。使う道具も厳選し、規則の範囲内で材質や強度を考え、自ら調整してブイ周りのレースに挑む。水の抵抗にも気を配り、船体は磨き上げられ、ある程度の速度からは艇の底に気泡を排出して抵抗を減らす。ロープや装備品、釣り糸等を水中に垂らすなどもってのほかというのが染みついていた。

それまで、海面上で順位を競うことに邁進していたが、教諭として赴任した沖永良部島では、夏場の勤務後に日が傾くと、同僚とリーフの外側をシュノーケリングで泳いだ。美しい珊瑚礁をバックに色とりどりの熱帯魚が舞う光景は得も言われぬ美しさだ。海面下への認識が、座礁の恐れのある暗礁から多様な生物の住処として変わった。

当時の校長先生が、釣りの名手だとのことで、頼み込んで同行する機会を得た。すると同じような道具（実は似て非なる物）で、すぐ隣で竿を出しているのに、自分の竿には一向に獲物が掛からない。たまにアタリがあっても糸が切れたり針が外れたりしてなかなか取り込むことができない。この釣果の差はどこにあるのか。疑問を校長先生にぶつけてみた。すると「魚の気持ちを考えんか」との仰せであった。

それから、自分なりの研究が始まった。まず、糸は結び目が最も弱い。折り曲げて圧迫された部分から切れるのは道理である。結び方を工夫することで強度が大きく変わる。多様な結び方を動画で学び、それぞれに適した結び方を使用する。

次に、釣行する時間帯は夜明けと日暮れの前後がゴールデンタイムで、それに潮汐については上げ三分と下げ三分、潮が動いている時間帯を狙いたい。これら魚の活性が上がる食事時を勤務のスケジュールに合わせるのが難しい。

さらに、餌を吟味する。撒き餌、付け餌、生き餌、対象魚によって集魚材を使うこともある。魚だって美味しそうなものを食べたいはずである。後にルアーを自作して釣果を上げることが喜びとなった。

そして、道具にもこだわった。同じ長さの竿でもその材質や太さによって、魚の瞬発的な力を柔軟に受け止め、力強く浮かせる弾力が求められる。リールにしてもただの糸巻き機ではなく、糸の限界を超える力で引く魚に、自動でスムーズに糸を送り出したり、手動のレバー操作で魚とのやりとりを堪能したりする機能もある。

狙った魚を釣り上げるために、美味しそうに見える餌を、魚が食べたい時に、魚の目の前に持って行く。そして、食いついた魚を確実に取り込む道具。釣り上げた魚の鮮度を保つ工夫を施し、見栄え良く捌き、美味しくいただく。最高の楽しみを教えいただいたと感謝している。

これまでに同じ教科書、同じ教具で同じ時間指導してもその成果に差があることがあった。何が違うのか。より効率的に進められないものかと試行錯誤を繰り返してきた。地域との交渉やお叱りのお電話の際、そのとき思うあの一言、「魚の気持ちを考えんか」

郷土の紹介

海と歴史と文化のまち
日本近代化への夢とロマンを求めて

旭小(日) 宮 﨑 みどり

一 はじめに

いちき串木野市は、薩摩半島北西部に位置し、海・山・温泉などの自然と温暖な気候に恵まれた風光明媚な環境下にあり、金鉱業や基幹産業であるマグロの遠洋漁業、江戸時代に宿場町として賑わった市来港など、港町として栄えた背景がある。また、薩摩スチューデント旅立ちの地である「薩摩藩英国留学生記念館」や徐福法師伝説の「冠岳」と「冠嶽園」がある。そして、新たに日本遺産に認定された「串木野麓」など、多くの貴重な歴史文化遺産が点在している。様々な場面で海と歴史・文化の関わりを感じると共に、先達のよき知恵や伝統が受け継がれた所でもある。

二 串木野鉱山

三百年以上の歴史を持つ串木野鉱山は、金の算出量が国内第四位で、芹ヶ野金山や荒川鉱山、羽島鉱山、芦場鉱山などがある。金は、藩の財源立て直しや明治維新を牽引する薩摩藩の大切な財源となった。本校区には、西山坑（現在:薩摩金山蔵）と芹ヶ野金山があり、千六百六十年頃、島津綱貴の指示によって本格的な採掘が始まった。串木野鉱山は、盛衰を繰り返しながら、現在でも金の一部採掘及び製錬は続いている。

三 串木野麓

戦国時代末に島津氏は、豊臣秀吉の九州平定に敗れ領地を大幅に削減されたが、武士の数だけは減らさず、本城である鹿児島城下に全ての武士を集住できず、独自の外城制度として各地の山城周辺に百二十か所もの「麓（武家屋敷郡）」を整備していた。串木野麓は、串木野城周辺に形成され、地頭狩屋跡は藩主の参勤交代・巡見等の宿泊所として活用されていた。麓での薩摩武士たちは、日々心身を鍛え、農耕に従事し、平和な世にありながらも武芸と軍事力強化に励んでいた。

四 薩摩藩英国留学生

ＪＲ鹿児島中央駅前の銅像、「薩摩の若き群像」で知られる「薩摩スチューデント」が、鎖国時代に近代日本の礎を築くため、決死の思いで密航に臨んだ黎明の地がここにある。薩英戦争を機に、日本の技術の遅れに危機感を覚えた薩摩藩は、海外に通じた人材養成の気運が高まり、薩摩藩洋学校「開成所」を中心に、優秀な学生十五名に留学渡航の藩命を下す。鎖国下において洋行禁止のため、「甑島・大島周辺の調査」としての辞令で変名を与え、トーマス・グラバーが用意した船に乗船させた。外国人の船員に囲まれた生活を送る中で、留学生の中には覚悟を決め、髷を切る者もいた。香港に到着した時、ガス燈で彩られた夜景に歓声を上げた者もいた。洋服を仕立て、紅茶を飲んだり、時計を購入したり。洋式便器を初めて見た五代友厚は、きれいな陶器に水が流れるのを見て洗面器と勘違いし顔を洗ったというエピソードも残っている。着るもの、食するもの、生活するためのものなど衣食住の全てが新鮮で、風習や習慣など体験したことのないものが多く、カルチャーショックが大きかったに違いない。留学生は、日本の近代改革への夢とロマンに思いを馳せ、見聞を広げながら、政治・経済、教育など数多くの偉業を成し遂げた。

五 おわりに

毎年、薩摩藩英国留学生の偉業を称える「黎明祭」が開催され、地元の小中学生が留学生に扮し、鹿児島弁や英語でスピーチなどを行っている。また、本市小学生も、薩摩藩英国留学生記念館見学が授業に位置付けてあり、当時の時代背景や歴史・文化について学ぶことができる。なぜ、留学生が命をかけてまで使命を果たそうとしたのか、言葉も生活環境も違う異国の地でどのような志をもって生活していたのか、深く考える児童も多い。金の採掘や麓での武士の生活、英国への留学は、国や薩摩藩のため、様々な思いが葛藤しながらも強い志と前進しようとする先達の姿は、尊敬に値する。海と歴史と文化、そして、日本の近代化への夢とロマンに心を馳せ、築いてきたその思いを受け継ぎ、この豊かな郷土にも感謝しながら、誇りをもってたくましく生き抜く児童の育成を目指していきたい。

総務部だより

総務部は、四月二十四日の定期総会において承認された活動方針や活動内容に基づいて活動している。今年度は各種会合等が予定どおり開催されており、その内容の一部を報告する。

一　地区校長会との連絡会

六月十五日に開催した大島地区校長会との連絡会を皮切りに、各地区校長会との連絡会を開催した。連絡会では県連合校長協会の活動状況を報告し、各地区校長会の現状や課題等の説明を受け、これらを基に意見交換を行った。主な話題については次のとおりである。

㈠　校長協会事務局から
ア　鹿児島県連合校長協会について
イ　学校予算の要望、人事・給与の要望について
ウ　九州・全国大会の際の校長会からの補助金について
エ　会員の慶弔見舞規定について　等

㈡　小学校部会から
ア　全国連合小学校長会について
イ　中央教育審議会「審議のまとめ」について　等

㈢　中学校部会から
ア　全日本中学校長会について
イ　学校部活動の地域移行について　等

㈣　各地区校長会から
ア　九州・全国大会への小規模校等からの参加及びその予算について
イ　中学校部活動地域移行の進捗状況等について
ウ　教頭職の処遇改善について
エ　土曜授業の今後の見通しについて
オ　「鹿児島の教育」等広報誌の発行について
カ　今後の特例任用校長の在り方について

二　教育関係機関・諸団体との連携

本会では各種教育関係機関や団体との連携を強化するために連絡会を開催してきている。今夏は県教委、ＰＴＡ連合会との連絡会を対面式で開催することができた。

「県教委との連絡会」は、七月三日に開催し、地頭所恵教育長を始め、副教育長、各課長等との意見交換、情報交換を行った。

秋には主に教職員課との連絡会を開催する予定である。

「県ＰＴＡ連合会との連絡会」は、七月十三日に開催し、ＰＴＡの在り方について意見交換を行った。

主な話題は、次のとおりである。

㈠　県連合校長協会からの事業説明
ア　令和六年度の運営方針
イ　各専門部の活動方針・活動内容　等

㈡　県ＰＴＡ連合会からの事業説明
ア　基本方針・力点
イ　県Ｐ五つの実践、施策　等

㈢　意見交換
「多様化する時代の中、学校の課題に保護者としてどうかかわるべきか」のテーマに基づき、ＰＴＡの在り方やその必要性、様々な取組の状況について活発な意見交換がなされた。

三　教育予算等に関する要望

各地区校長会・県立学校からの要望を庶務担当者会で集約し、原案を作成。その後、七月二十九日の総務部会での審議及び八月五日の役員会での検討を経て、八月二十二日の常任委員会で承認された。

今後、十月二十九日に「人事並びに給与に関する要望」と併せて県教委に直接要望する予定である。

四　総務部会

総務部は小・中・高・特の四校種による連合校長協会の活動を総合的に推進する役割を担っていることから、諸団体や各地区及び各市町村校長会との連携を深め、学校経営上の喫緊の課題に対処するよう、活動の充実に努めている。毎年三回の部会を計画しているが、今年度は第一回を六月十一日に、第二回を七月二十九日に開催した。第一回では、各校種部会長からの報告の後、令和七年度学校予算に関する要望書作成について協議が行われ、小・中分科会、高・特分科会に分かれて情報交換が行われた。寄せられた要望事項については、第二回総務部会で審議を重ねた。多くの校長の願いが県教委・市町村教委に届くよう活動を進めたい。

なお、第三回は令和七年一月二十八日の開催を予定している。

一般財県校長会館だより

校長異動

○ 新任　令和六年八月二十八日付
志布志市立有明小学校長
夏越　伸一氏
（前志布志市立有明小学校教頭）

○ 新任　令和六年八月二十八日付
中種子町立岩岡小学校長
蔀　久恵氏
（前中種子町立岩岡小学校教頭）

○ 新任　令和六年八月二十八日付
龍郷町立赤徳中学校長
長野　素子氏
（前霧島市立隼人中学校教頭）

教育講演会

前月号に続き、教育講演会のご案内をします。

講師は、四代目ドクターコトーこと、室原誉伶先生で、

「離島の診療所から見える日本の未来
―四代目Dr．コトーの挑戦と学び―」

と題してご講演いただきます。

本年度は、直接会場で参加することが難しい方のためにライブ配信を計画しています。

当日、お時間になりましたら、下の二次元コードを読み取り、ご覧ください。無料でご覧いただけます。

編集後記

慌ただしく新年度が始まり、あっという間に一学期が終了し、夏休みもあっという間に過ぎ去ったのではないでしょうか。二学期が始まりました。運動会や体育大会、学習発表会や文化祭、修学旅行等も計画され、学校行事の準備や実施等、一学期以上に慌ただしい毎日が予想されます。

さて、私事ですが、十年ぶりに学校現場で働くことになりました。コロナ禍を経て、学校の在り様も随分変わっていました。学校における業務改善の必要性も相まって、業務の簡素化や効率化、業務改善への職員の意識も良い意味で変化しつつあることを実感しています。

しかしながら、変わらないのは教頭先生方の忙しさではないでしょうか。私も教頭職を経験したことがありますが、現在の教頭先生方の働きを間近で見ていると本当に頭が下がる思いです。野球に例えると、教頭はキャッチャーで守備範囲が広く、扇の要そのものです。教頭が一二塁間や三遊間のゴロに飛びつくことがないように、職員にはしっかり自分の守備範囲を指導していきたいと思っているところです。教頭先生方が業務改善が進んでいると実感できるようにしていくことが我々校長職の務めだと強く感じます。自戒の意味も込めてあえて書かせていただきました。

末筆になりますが、今月号も数多くの玉稿をお寄せいただきましたこと、深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

松永　英一（桜丘中学校）